

高校生の短歌大会 田中拓也

高校生対象の短歌大会が増えている。岩手県盛岡市で二〇〇六年から開催されている「全国高校生短歌大会（短歌甲子園）」、宮崎県日向市で二〇一一年から開催されている「牧水・短歌甲子園」、富山県高岡市で今年開催される「高校生万葉短歌バトル二〇一六」。いずれも、高校生が現地で開催される大会に参加し、三人一組のチームで対戦するというスタイルである。

これらの大会は投稿作品を審査員が選歌する「コンクール型」と異なり、ディベートや歌合の型式でおこなわれるところに特徴がある。私自身、盛岡市で開催されている「短歌甲子園」には第二回大会から関わっているが、出場者の中には高校卒業後も短歌を続け、大学短歌会や結社に入ったりする動きが生まれている。特に、昨年夏の大会では「短歌甲子園」に出場したOB・OGによるボランティアチームが組織され、大会運営の大きな力となっていた。また、高校卒業後も短歌を続けるためにはどのような方法があるのかをガイドライン化して、現役高校生たちにもどんどん教えていた。近年の大学短歌会の活性化と連動するこれらの活動は短歌という詩形が次の時代につながるうえでも大きな意味を持つていると思う。

これらの動きをより確かなものにしていくために、あえて問題点も挙げておきたい。まずは開催時期の重複である。これらの大会はすべて夏休み中の八月中旬に集中している。開催地域は東北・

北陸・九州と離れてはいるが、全国規模の大会であることは共通しており、開催時期の重複は参加校にとって大きな負担となるものである。「短歌甲子園」「俳句甲子園」双方で優勝・準優賞の成績を収めた文芸部の顧問教員は、移動の負担、学校行事との調整の困難、生徒の体力問題などを踏まえて、何らかの調整が必要ではないかと指摘していた。二点目はSNS上のトラブルの問題である。現在、SNSは広く普及しており、利点もあるが問題点も数多い。詳しくは述べないが、生徒が参加するスタイルの大会の場合は、審査員の一言や学校間の接触により、思いがけないトラブルが発生する場合がある。高校生という特性上、プライバシーや教育面での配慮という点も指摘しておきたい。これら的大会には歌人も数多く関わっているが、「歌人」は当然ながら「学校教育関係者」ではない。また、そうである必要もないが、参加を許可する学校サイド、そして引率教員、さらには保護者にとつては「学校活動」「教育活動」の一環としての大会である。このことは、主催者団体・関係する歌人の側も強く留意すべき点とと思う。

さて、視点を変えてスポーツや武道関係では同様の大会が夏季に集中しているが、各種調整によって、すみわけがきちんとおこなわれている場合が多い。今後、高校生の短歌大会を長く続けていくためには、主催者となる団体をはじめ新聞社、高等学校文化連盟などの緊密な連携は必要不可欠である。すでに、野球やサッカーなど団体競技の部活動の中には少子化に伴い、チーム編成が困難な学校も激増している。少子化は短歌人口にもじわじわと波及し、それは結社の存続にも波及していくことは容易に予想される。これからの短歌史のためにも、問題提起しておきたい。